

子どもへのデス・エデュケーション

—ある小学校長の授業実践から—

工藤 真由美*

**Death Education for Children:
Learning from the Practical Record of an Elementary School Principal**

Mayumi Kudo

本稿は、いのちが希薄化した今日の社会情勢に鑑み、いのちの重み、大切さを実感できるような、実践的で本質のないのちの授業を構想することがねらいであり、そのために過去の教育実践を紐解き、そのエッセンスを汲み取ることを主眼とする。

横浜の浜之郷小学校の校長、大瀬敏昭氏は自身の闘病から死に至るまでを、その死と直面しつつ生きる心情、絶望と恐れ、希望と勇気を、それらを与えてくれた絵本との出会いというかたちで子どもたちに紹介していく。彼の自己の病状を包み隠さず、平易な言葉で子どもたちに語りかけていく「いのちの授業」の実践記録が、我々に示唆するところは大きい。それは、我々自身が人生から問われたものとして、真摯に日々生きる姿の中にこそ、真の「いのちの授業」が生まれてくるというものであり、また、最後まで学び続け変わることが人間の可能性であり、その点で死は人間にとって成熟する最後のチャンスであるということである。

Key words: death education, picture book, practical record

初めに

今日の社会はいのちの重さが実感されにくく、各年代で自殺が社会問題化し、子どもの自殺も相次いでいる。いのちの大切さを教育すべき教育者の自殺も報告されるなど、余りにもいのちが軽く扱われる現象がみられる。そのような中でいくらいのちの大切さを強調しても、人々の実感は乏しいのではないだろうか。また、日々このようなニュースを重ね聞く経験は、いのちの重さについて再確認することを促すよりも、日常茶飯の事態に人の死に痛みを伴わない鈍化現象を引き起こすことにすらなっているかもしれない。

しかし、他方子どもたちにいのちの大切さを教える授業実践も報告されている。それらの実践は大別すると、①授業を科学的に分析し構成したもの¹⁾、②自己の経験を踏まえて授業展開したものとなる。後者はさらに、自己の家族など近親者の死の経験²⁾と、自分自身の病や死に直面した経験³⁾とに分けられる。しかし自分自身の死に直面した経験を語ったものはレアケースといえよう。そ

こで今回はその中でも後者の、自身が死と直面しながら、子どもに「いのちの授業」を行ったある小学校長の実践を通して、今日の社会で求められるデス・エデュケーションの形態を探ってきたい。

(1) いのちの授業

横浜にある浜之郷小学校は、1998年開校の新設校である。学校づくりが順調に進み始めた2年目、校長の大瀬敏昭先生がガンの宣告を受けることになる。胃を全摘し、1ヶ月半で職場復帰する。しかし、以後は再発転移、死の恐怖との闘いが始まった。

だがそれだけなら一人の人間の闘病という形で終わるのだが、彼は校長という職にあり、自己の体験、死の宣告、闘病から得たこと、感じたことを、子どもたちへの授業として還元していく。その主要をなしたのは、かれの恐怖と絶望の淵に沈んだ気持ちを助けた絵本だった。『わすれられないおくりもの』『100万回生きたねこ』『1000の風 1000のチェロ』『ポケットのなかのプレ

* 四條畷学園短期大学 保育学科

ゼント』等。

大瀬氏によると、「私にとって、死への不安・恐怖を和らげてくれたのが絵本であった。」⁴⁾ というのである。そのため、大瀬氏は「いのち授業」のはじまりを絵本の読み聞かせからにした。

授業の構成は次のようである。

- 1、 がんという病気について話す。
- 2、 自分（大瀬校長）が、がん患者であることを知らせる。
- 3、 死の不安・恐怖から救ってくれたのが絵本であったことを知らせる。
- 4、 絵本の読み聞かせ
作品名『わすれられない おくりもの』『100万回生きたねこ』『ポケットのなかのプレゼント』
- 5、 感想を絵や作文に書いてもらう。

大瀬氏はこの授業スタイルを振り返り、後に次のような感想を述べている。

「授業というにはあまりにも単純で、子どもたちは、ただ私の話と本の読み聞かせを聞くだけである。その後の『いのちの授業』は、素材を教材化したり、話し合いの場面を組織化したりして、いわゆる授業らしくなっていた。

ただ、最近になってそのころの『読み聞かせ授業』の感想文や感想画を見ていて新たな発見があった。それは『授業らしい授業』後の感想文に比べて、『読み聞かせ授業』のほうが、実に素直な子どもの内面がうかがえるものが多くある、ということである。その中には、いわゆる小さな物語が語られていた。」⁵⁾ と。

またその授業の最後の感想文や絵を見て、彼は次のように述べる。

「授業といっても大変シンプルな授業であるが、このように深く考えてくれたことがうれしい。そして、この授業をとおして、私自身が多くのことを学ぶことができた。『家族』について、『命』について、そして『愛』について。授業構想から、あるいは授業をしながら、授業後の研究会をとおして、そして子どもや保護者の感想文を読みながら、私自身が変わっていった。まさに『学ぶことは変わる』を実感している。」⁶⁾ と。しかし、授業形態に関しては、彼は決して満足しておらず、常に試行錯誤し、後に取り上げるような将来構想を持っていた。（(4)「いのちの授業」の一般化にむけて 参照）

(2)「いのちの授業」の根底にある大瀬氏の教育観の変化といのちの三相

大瀬氏が「いのちの授業」を構想、実践するにあたり、その背後には、病気を契機とした彼の中での教育観の変化があった。それがあったからこそ、また子どもたちへの授業という視点が開かれたのだといえよう。

彼は、入院中の体験から、医療現場と学校の共通点を見出した。そこから学校づくりの方向性を転換させていき、学校の意義を問い直していった。その第一の点は「言葉かけ」と「身体性」である。

それは看護師の「言葉と身体」から感じたことだという。看護師の身のこなし、声の大きさ、スピード、声の質などがすべて、患者や家族に不安を与えないようにかつ的確に「言葉かけ」がなされている。そこから大瀬氏は「医学と教育」について考え始め、教育実践に生かすように思案し始める。

患者にとっては治療以上に癒しが必要である。それは病気を治そうという患者の意識がケアや癒しにより高められるからである。病に倒れ傷つき苦しむ患者に投薬し背をさすり手当てする。手当てをしたものとされたものが、「共に癒えていく喜び」を共有しあう。大瀬氏はこの構造は学校にも当てはまると指摘する。

「ある問題や課題について解決の方法がわからず、苦しむ子どもがいる。また、家庭のこと、親のこと、友だちのこと、さまざまなことで悩む子どもたちがいる。このような子どもたちに手をさしのべ、その解決に向かっていっしょに立ち向かい『共に気づいていく』教師の姿が学校にはある。『援助を必要としている人へのかかわりあい』ということにおいて、医学と教育は、同じような構造をもつと考えてよいのではないか。医師の治療という行為に対応するのが『共に学ぶ』という教師の行為である。それに対して、看護・ケア・癒しというナースの役割を担うのも学校では教師である。したがって、学校における教師のは、そのための『技』が必要なのである。そして、このような実践的行為は『身体』『言葉』が大変重要なテーマになってくる。」⁷⁾ と。

また、大瀬氏が見出した第二の点は「弱さを認める教育」である。

それは、「これまでの健康に立脚した強さを求める学校ではない。弱さを自覚した子どもたちと自分の無力さを自覚した教師とが『ケアと癒し』を含

みこんだ応答的な営みを行う場として、さらにはその応答的な営みをとおして子どもたちと共に生きると同時に、大人自らも育つ場として学校を再構成することである。」⁸⁾と。

そのため浜之郷小学校では教育を「ケアリングの教育」として捉えている。ケアリングとは子どもたちに対する「教師の日々の配慮＝心砕きの心」であり、「他者の喜びや苦しみに寄り添い、魂の重さに気づくという行為」なのである。教師と子どものさりげない優しさや子供同士の支えあいを日常の学校生活のなかにどう築いていくか、ということである。さらにケアリングは教師と子どもの応答的な営みであり、教師の心構えの問題なのである。そして、このケアリングの教育を支えているのが「いのちの授業」である。

最後に彼が闘病から感じ得た第三の点は、「悲しみの復権」ということである。

それは、「この授業を構想するきっかけであった。それは少年少女時代に他者の不幸に悲しみを感じ涙を流すという経験をすることを排除して、『明るく、楽しく、強く』という価値観だけを押し付けると、その子の感性も感情生活も乾いたものになってしまうかという危機感である。『いのちの授業』の教材は確かに重いもので明るいとは言えない。しかし、命や家族について考えることをとおしての子どもたちの悲しみの感情や涙は、実は心を耕し、他者への理解を深め、すがすがしく明日を生きるエネルギー源となると考える。」⁹⁾というものである。

以上のような大瀬氏の教育観の変化は、命の捉えかたの変化とも底通している。

大瀬氏は「いのちの授業」の中で、子どもたちに命の捉え方として「命の三相と『とらえ』の三層」という表現を用いて説明する。

命の三相とは、「固体としての命」「種としての命」「心としての命または魂としての命」である。

一つ目の「固体としての命」とは、個々の、あるいは一人ひとりの命であり、限りあるいのちである。

二つ目の「種としての命」とは人間として、種族として、あるいは家族としてリレーされる命である。有限な命に対して「連続する命」といえる命である。

三つめの「心としての命」「魂としての命」は先の二つの有限な命、リレーされる命に対して、「無限な命」「永遠の命」と考えられるものである。

また、さらに『とらえ』の三層」として、「固

体としての限りある命」から、親から子へそして子から孫へ「連続する命」、さらに人の心に残る「永遠の命」があるとしている。大瀬氏はこれらのように命についての理解を浅い理解からより深い理解へと進めることを志向している。

また、大瀬氏は命の授業を通して三つのことを子どもたちに伝えたいと願っている。

一つは、命は誰にも等しく「限りがある」こと。二つ目は「命は縮めることはできても、延ばすことはできないということ。だからこそ命には尊厳があり自分自身も他者もけって命を縮めてはならないし、自分自身を辱める行為もそれに匹敵する」ということ。三つ目は「人間が生きていく中にはどちらかという辛いことや苦しいことのほうが多い。そういうとき、安易に自分の命を縮めたり、辱めたりすることがないようにするには、自分を支えてくれる『もの』をもつことである。それは、何かを信じる心であり、あるいは家族である」。¹⁰⁾以上の三つを彼は子どもたちに伝えたいと願っている。

(3) 授業実践記録

ではここで、大瀬氏の教育観の変化、命の捉え方の変化から生じた、大瀬氏の授業実践についてみていきたい。

ここで紹介する実践の対象は6年生である。

まず導入部分は、「命の学習」という言葉から何を連想するかを問う。

児童は「生き物」「植物」「人間の命」と連想していく。

「今日は人の話をしたいと思います。」

生命・・・生きる、命、そして死、と連想させていく。「生きるということと対になっている言葉というと、やっぱり死ぬということになる。」「自分の家族や、知り合いとか、親戚の方で、ごく最近お亡くなりになった人はいますか？」

テーマを自分自身の問題として身に引き付けさせるように言葉をかけていく。

身近な人の死が、死因とともに挙げられていく。

死因で一番多いのがんであり、三人に一人の割合でがんで亡くなっていること、そして大瀬校長自身もがんであることの説明が、病状の経過と

ともにわかりやすくなされていく。

検査をしたら、胃がんであることがわかり、胃を全部摘出したこと、多くを食べられないこと、食べることもどしてしまうことなどを赤裸々に語っていく。

がんという病気は他人にはうつらないが、自分自身の中でうつっていくこと（転移）

すでに自分のがんは大腸に転移していること。

腎臓も一つが駄目になり、もうひとつが駄目になると死んでしまうということ。

また、医師からがんであることを告げられた時の心境も語っていく。

「テレビ番組で『あなたはがんですよ』っていわれるシーンがあるじゃない。自分もなにかテレビを観ているような感じ。ああ、私も死ぬのかな。信じられない。でもしょうがないかなというのもありましたけども、落ち込んでね。」「自分は間もなく死ぬんだなというのが、だいたいわかったから。でもそんな簡単には死ねないぞっていう気持ちもありました。」

その時に出合ったのが絵本であった。

同じく余命三ヶ月とがんの宣告をうけ、残していく子どものために、自分の想いを絵本の形にして残した、柳沢恵美さんの『ポケットの中のプレゼント』。

そして、一番感動したのが『わすれられないおくりもの』

「私が、自分が病気で、退院してから、すごくいやになって、もうどうしようかなと思っていたときに、今でも覚えていますけれども、本屋さんに行って絵本を買ったんです。この本、読んだことがあるでしょう。あるよね。これが一番感動しました。」とって、『わすれられないおくりもの』を読み始めた。

「さっき植物の話もしたのですが、アナグマもそうですけれど、いろんな思い出を残してあげますね。これを読んだときに、じゃあ自分は、例えば浜之郷小学校のみなさんに何か残してあげられないかなと思ったのです。ひょっとしたら、何も残してあげられなかったかもしれないな。それじゃいけないなという思いがしました。だから、退院して、くよくよしていてもしょうがないという思いになったんですね。何か残してあげる。思い出をやっぱり何か残さなければいけないかな。で

も、どうすればいいのか、まだわかりませんが・・・」

大瀬氏の揺れる気持ち、何か残したい。しかし授業としてどのような形態がいいのか、その模索する気持ちが「でも、どうすればいいのか、まだわかりません。」という言葉になったのであろう。

次に『100万回生きたねこ』『クマよ』

『クマよ』は写真家の星野道夫氏の写真集である。アラスカに行った動物の写真家星野氏が、アラスカでクマに襲われ死ぬ。彼の写真集のなかで、熊が大きな自然の中で死ぬ。それを見て、熊をなんかちっぽけだなというように感じる。熊が死んで自然に戻っていくのだなと強く感じたことを話す。

そして、最後にまとめの話。

「君たちもそうですが、全員共通しているのは、みんな同じなのです。何が同じかというと、いつかは必ず死ぬということ。これは逃れられない。ただ、ちょっと早く死ぬ人もいます。でも、さっきの熊の、大自然の中から考えると、それほど時間は関係ないんだよね。」

「みんな死ぬのだから、死ぬということは、生きることなのだという、死ぬまでどういうふうに生きるのかなということ。」

「だからさっき話したように、ああ、生きることなんだなと。ところがアナグマさんみたいに、確かに体はなくなる命はなくなるかもしれない。でも、アナグマさん、生きていますよ。この村の動物たちの心の中にはしっかり生きていますよね。ということは、死ぬことから、また命がうまれるのなこと。このことは体はなくなってしまうけれども、ちゃんと、また新たに生きることが始まるんじゃないのかなということだと思おう。」

そして、大瀬先生の子どもたちへのメッセージが三つ伝えられていく。

「みなさんをお願いをしたいのは……。これから死ぬまで、大人になるまで、大人になってからもそうですが、つらいこと、たくさんあると思います。壁にぶち当たることがあるでしょう。でも、絶対に、死んではだめだよ。絶対に死んではだめ。自分で自分の命をおしまいにする人がいるでしょう。それはだめ。なぜならば、校長先生だ

って、死にたくない。できれば命をいただきたい。もし、もう自分の命がいらぬよという人がいて、その人の命をもらえるのなら、もらいたい。なんでもったいないことをするかな。それは、ほんとに死ぬことにつながる。きちんと一生懸命生きてきて死ぬのなら、新しく生き始めることができる。そうではなくて、自分で自分の命をなくしてしまうことは、ほんとに死ぬ。」

「それからもう一つ、自分が何か信じるものをぜひもってほしい。そうすると、壁にぶち当たったときに、きっと助けてくれる。それは、自分の家族かもしれない。私はお父さん、お母さんを信じている、それでも構わない。あるいは、神様を信じる人が出てくるかもしれない。仏様を信じる人が出てくるかもしれない。それは何でもいい。とにかく何か信じるものを少しずつもっていると、そういう壁を乗り越えることが必ずできると思う。」

「最後、三つ目。卒業式のときにもお話しましたが、壁にぶち当たったり、いやだなと思うことがあったら、子どものときにはそうでなくてもいいと思いますが、大人になって、いやだなと思ったり、どうしようかな、疲れたな、冗談にでも死んでしまおうかなと思う。ほんとに死んじゃだめだよ。本屋さんに行って、なんでもいいから絵本を一冊ずつ見ていく。必ずあなたたちを力づけてくれる絵本が一冊、必ずあると思う。それはほかの人にはわからないけれども、そのときにあなたを力づけてくれる絵本が必ず一冊ある。子どものときに読む絵本とちょっと違うと思う。ぜひ読んでみてください。」

最後に最近気に入った絵本、素敵だと思った絵本、『あおくとときいろちゃん』の朗読。そして、最後の子どもに向けて決意の一言で授業は締めくくられる。

「今、私の願いは、あなたたちの卒業証書の名前を書くまでは倒れられないな。だめかもしれませんが、それまではがんばらなければ……。10か月間、ぜひ倒れないようにがんばります。卒業証書を書けるように、無理をしないようにやりたい。はい、終わります。それでは、ありがとう。」

11)

(4) 「いのちの授業」の一般化に向けて

大瀬氏は上述したような自己の「いのちの授業」を振り返り、死を見つめた上でどう生きるかが、「いのちの授業」であると述べ、そして誰でも手がけられる「いのちの授業」の一般化に向けての構想を抱いていた。

『いのちの授業』は、『答えを求める授業』ではなく、自分だったらどうするかを自分なりに考えさせる授業である。そのためには、そのような授業ができるような題材を選び、教材化することが何よりも求められる。しかし、低学年から高学年まで共通する授業の素材を選定し、子どもたちの発達段階に合った教材に創り上げ、全ての教科・道徳をとおして、命のつながりとか重さ、そしてろさについて学ぶことを用意することは非常に難しいのである。

私の行っている『いのちの授業』は、私自身ががん患者であり、死がちかいかもかもしれないということ子どもたちも知っている中で行っている。そういう緊迫した中での授業であるから、子どもたちの心のもち方も変わってくるのだと思う。では、そういう状況にならなければ『いのちの授業』はできないのか、ということになると一般性がないことになる。では、どのようにすればよいのだろうか。

それにはまず、『いのちの授業』を行う教師自身が、どれくらい自らの命について真剣に向き合っているか。もっと言うと、よりよく生きようとしているか、というものを自分の内面にもっているかということが、何よりも求められてくると思う。

道徳の授業の教材として『心のノート』が使われる。単なる道徳の授業としての『いのちの授業』では、本当に子どもたちの心に響く授業となるのであろうか。カリキュラムにあるから、あるいは心のノートにあるから、というような『いのちの授業』で、子どもたちの『知的な、実践を伴わない道徳心』はある程度育つかも。しかし、その中では一人ひとりの子どもたちに、いわゆる『小さな物語』は生まれることは難しく、さらに、生き方まで迫る授業はできないのではないだろうか。それは、授業以前の、教師自身が命とどう向き合っているかが問われていないからだと考える。『いのちの授業』は、子どもはもちろんのこと、教師自身の生き方を求めることにほかならないのである。そういう意味では、『いのちの授業』は自らの生き方に目を向けることができる教師なら、誰にでもできると、私は思っている。」¹²⁾と述べ

る。

(5) まとめにかえて

大瀬氏の授業実践や教師としての姿勢から、そして何より一人の人間として我々が学ぶべき点は何であろうか。

一つ目は、人間が人生から問われたものとして日々生きる真摯な姿勢である。それは、大瀬氏自身もフランクルの言葉を引用しつつ述べているように、「われわれが、人生の意味を問うのではなく、われわれ自身が問われた者であり、自分の人生に対して毎日毎時、正しい行為によって応答しなければならない」¹³⁾ という生き方である。

二つ目は学ぶことと変わることという学びの本来的な姿である。大瀬氏は、死を見つめつつ「いのちの授業」を通して、授業構想や、授業研究会更に、子どもや保護者の感想文から、自分自身が変わっていったと振り返っている。まさに「学ぶことは変わること」を実践したといえよう。このような姿は、人生の中での学びを通して変わり続けていく、「死は成熟するための最後のチャンス」¹⁴⁾ として我々に迫ってくるのである。

そして、我々に残された問題は、やはり「いのちの授業」の一般化である。だが、これは大瀬氏も述べているように「教師自身が命とどう向き合っているか」が問われるのである。我々一人ひとりが人生から問われたものとして生きることの中から、一つ一つ方法を固めていかねばならない。大瀬氏は「もしも私がもう駄目だといったとき、そのあたりからなんらかの形で記録を残してもらいたいわけです。死んでいく様子を。で、それをみせたい……。私が授業をやるわけではないけれど、誰かがね。それを見せて誰かに授業をやってもらいたい。死ぬっていうことは、そういうことなんだっていうことを最後に伝えていきたい。そうしないと、何かを残せないような気がしています。」¹⁵⁾ と最後の授業検討会で語った。死の恐怖に直面してもなお授業の一般化に心をくだき、自分自身の最後の場面すらも子どもたちに誰かの手を通して授業として見せて欲しいと願った。まさに壮絶ともいべき子どもたちへの「いのちの授業」への思いがあった。その真剣さの中に我々は「死を見つめた上で『どう生きるか』、それが『いのちの授業』だ」という重いメッセージを受け取らなければならない。

注

- 1)『死を通して生を考える教育—子供たちの健やかな未来をめざして』中村博志編著 川島書店 2003年2月
- 2)『生と死の教育実践—兵庫・生と死を考える会のカリキュラムを中心に』古田晴彦 清水書院 2002年11月
- 3)『輝け！いのちの授業』大瀬敏昭 小学館 2004年4月
- 4) 同上 p 13
- 5) 同上 p 34
- 6) 同上 p 47
- 7) 同上 p p 14-15
- 8) 同上 p p 15-16
- 9) 同上 p p 28-29
- 10) 同上 p 32
- 11) 同上 p p 110-123
- 12) 同上 p p 184-185
- 13) 同上 p 188
- 14) 同上 p 185
- 15) 同上 p 92

**Death Education for Children:
Learning from the Practical Record of an Elementary School Principal**

Mayumi Kudo

Shijonawate Gakuen Junior College

The aim of this thesis is to develop such a lecture as enables children to experience the importance of life, and to learn from the past teaching practices.

Mr. Ohse, the principal of an elementary school, has honestly taught his students in his classes his feeling of being ill with a terminal cancer and the importance of life.

What we can learn from his “lecture on life” is that to live earnestly each day is the essence of the “lecture on life” and that we can improve ourselves by continuing to learn until we die.

Key words: death education, picture book, practical record